

アマゾンでピラニアを釣る

理事 長谷川憲治

「アマゾンや、どこが尻やら頭やら」という俳句がある。読み人知らずだ。しかし、これはギョーカイ用語というバレー句で、およそ俳句などといえるものではない。だが目の前に広がるアマゾンには、この句が妙に実感をもって迫る。熱帯の四季のない水面がどこまでも続き、まことに茫漠として水天彷彿、ただクリーム・コーヒー色の波だけである。日本流の、河岸段丘に沃野が続き、木立の下の道路、流れに合わせたコンクリートの白い護岸の曲線という景色はここには全くない。ただ大小の船が汽笛の音もなく近すぎ、また通り過ぎて行く。赤道近くの太陽を照り返す水面はサングラスを通して目に痛い。

リオ・デ・ジャネイロから北へ5時間、途中、首都のブラジリア空港に立寄ったほかは、飛行機はただ緑一色のジャングルを眼下にして、ここアマゾン中流の都市マナウスに着く。アマゾン、延長は6千3百kmでナイル河に次ぎ、揚子江と肩を並べて世界第2位。川幅はマナウスあたりで6km、向こう岸が望めるわけがない。ついでにいうと、アマゾン6千3百kmには橋梁が一本もない。集落、小都市が大延長に沿って僅かに点在し、貨客船のみがこれを繋いで、道路といえる程のものが存在しないのだ。河がハイ・ウエーそのもので、そのうえ川幅がやたらに大きいから橋がある訳がない。文字通り橋の無い川である。鉄道より先に自動車か、自動車の前に飛行機と、近代の歴史を完全に逆転して交通機関が普及してしまったのだ。流域7百万km²への文明の伝播はアマゾンの水路、そして道路でなく飛行機である。

ふと見ると埠頭のコンクリートの壁に幾つも印がある。聞けば過去の洪水の水位を示したものだという。雨季と乾季の水位差はここらあたりで10m程度だそう。

ピラニア釣りに行くためミネラル・ウォーターを買う。炎天下の釣りは喉が渇くものだし、この濁ったアマゾンの

水は飲めたものじゃない。店番の混血らしい少年がどこから来たかというから「ハポン（日本）だ」と答えると「ハポン？ 船で来たのか、車か、それともバイク？」とバイクのエンジンをふかす手付きで屈託がない。学校へは行っていないに間違いはない。インディオの先祖はモンゴル族とされている。片言の英語を話すこの少年もお尻に我々と同じ蒙古斑点があるのだろう。観光とは残酷なものだ。この貧しい人々の顔を靴底で踏みじめるようにして通り過ぎて行くのだから。ここでは観光客というのが基本的に不道德な存在で、観光産業は貧困に寄生しているのである。はじめから貧者を踏みつけることで成立していることを忘れないでおこう。

ところでピラニア釣りである。ツアーの一行は2隻の大型ボートに分乗してアマゾンに繰り出した。スズキの船外機がついている。まず河に浮かぶガソリンスタンドに立ち寄る。河川が基本的な交通路で、それに水位の変動が大きいから水上にスタンドを作るのは納得できる。1時間も白波ならぬコーヒー色の波を切りながら遡上って、支流に入った途端がジャングルの中の浸水林である。

アマゾンの河川勾配は極めて小さい。というより無いに近い。河口から1,400kmのマナウスの海拔が42mである。アマゾンの流れは河川勾配ではない、地中から湧く水と空から降る雨がこの水を押し流すのだと現地の案内人がいう。水位が高くなればジャングルはそのまま冠水し、ボートはその浸水林、人間でいうと膝から腰あたりまで水に浸かった樹々の間を進む。まるで山歩きの藪漕ぎだ。下枝、太いツルをかいくぐりながら、しかもスピードは落とさない。乾季になって水位が下がると本来の水路が現れるが、今はまだ水量が多く、蛇行する水路に自然の捷水路が生まれて近道ができる。ときどきインコのような色の鮮やかな鳥が暗い樹冠の下を飛ぶ。このジャングルが東西南北どこへ向かって



も何千キロも続き、未開刺青のインディオ達が毒矢をかまえて潜むかと薄気味悪くなる。噂に聞くアナコンダ、ン10メートルの大蛇が棲息するというが、幸い姿をあらわさなかった。

と、突然ジャングルが切れる。太陽がグワッと照りつける水面に飛び出す。が、たちまち船頭は舵を廻して再び浸水林に突入する。今度は木立がまばらになった。そこを、ぐるぐると、かなり回って、やがてエンジンを止める。いよいよピラニヤ釣りである。ボートの下の水は暗く濁って深沈、いかにもピラニヤの暴力が支配するかの如くである。船頭が渡す釣竿は長さ2mほどのお粗末な木の枝、それにナイロンの糸がついて、その先に鋼鉄のワイヤーが10センチほど、そして日本では石鯛に使うほどのガッシリと大きな釣り針が結んである。餌は牛肉の赤身。針に刺すと血でベツリになる。急いで釣糸を水中に沈めようとしたら船頭が制止する。その前に、まず全員が釣竿で水面をいっせいにバシヤバシヤと掻き回すのだ。魚を驚かせないようにソツと餌を入れるのが常道と思ったら、ここでは牛が河に落ちたような盛大な水音を立て、それと生肉の血の匂いで魚を寄せるのだ。

待つ程もなく船頭が大ナマズを引き上げた。続いてあちこちで釣れはじめ、歓声が上がる。水が濁っているから魚が顔を出すまで何か釣れているかわからない。ググッとくるから、よいしょッとあわせる。手ごたえ十分、竿が弓なりにしなる。一息アマゾンと綱引きして竿を上げると20センチほどの不敵、猙猛な面構えのピラニアが睥睨して瞬きもしない。もっとも魚には眼瞼がないから瞬くはずがない。引き上げれば船頭が手早くはずしてくれる。歯はゾーリングン、あごはベンチ、それがシバタバタと狂ったように跳ね廻るのだから素人の手には負えない。指なんか一口で食いちぎると脅かされる。1時間ほどもやったろうか、全員が2~3匹、4~5匹釣って納得したところで納竿。

ボートは再び勢いよく走って、こんどは水上レストランに着く。といっても僅かに水面に顔を見せた土地にしがみつく浮き棧橋で、屋根があつて椅子を並べた程度のものだ。船頭は早速ピラニア料理にかかる。日本人ご一行だからまず刺身だ。これはうまかった。白身で味は鯛に似て、しかも身がしまっているというよりは堅いほどで滋味。もちろん醤油、ねりワサビが付いてきた。アマゾンを噛みしめながらビールで乾杯する。次は空揚げだ。しかし、こっちはそれほどではない。揚げ油がオリーブ油で古すぎた。



ここに私のバイブルがある。「解説 河川環境」河川環境管理財団編・山海堂で、昭和56年河川審議会答申「河川環境のあり方について」の詳解である。バイブルだからお経を上げるようにして読む。お経だから、所どころに心に残るくだりがある。

「河川環境とは、水と空間との統合体である河川の存在そのものによって、人間の日常生活に恵沢を与え、その生活環境の形成に深くかかわっているものをいう」と定義した答申の解説あたりである。

「河川環境とは河川を主体にするものではないことはいうまでもない。例えていえば、人跡未踏のアマゾン河の源流には河川環境はない。そこには大自然はあるかもしれないが、主体となるべき人間がないからである」と鋭く言い切って煩惱がない。だからといって、源流の自然を破壊してよい、破滅を見過ごしてよいというのではない。そこに住む人間のために、そのための河川のありようを追及すべしという姿勢である。川は生きていとか、かけがえない生命の美しさ、尊厳を護ろうという声高なアピールも、つきつめれば人間のエゴを綺麗事に包み隠すおめでたい感傷であり虚飾ではないかと、確固として右顧左眈しないところかバイブルのバイブルたる所以である。

マナウスから帰る朝、ホテルの前がにわかに騒々しくなった。見れば祭りの山車のように飾ったトラックの行進で、マイクを持った男たちがナントカ、カントカ、ワーツと拳を振り上げて絶叫、連呼している。合わせてラッパに太鼓にシンバルが陽気に囃し立てる。言葉は解らないが、どうやら選挙運動らしい。ここでは選挙もリオのカーニバル、サンバのリズムだ。ド貧困と底抜けの陽気が一緒になって炎天下を通り過ぎて行った。

ふと思う。どこが尻でも頭でもよいが、この人達がアマゾンの河川環境を自分のこととして考える日がいつか来るだろうか。